

各 位

2020年6月26日

株式会社 山と溪谷社

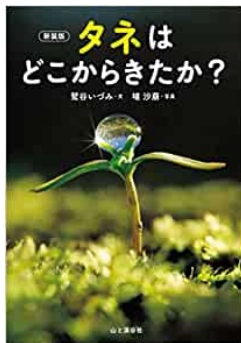
<https://www.yamakei.co.jp/>

一粒のタネから始まる「エコロジー」の物語 『タネはどこからきたか?』新装版で出版

インプレスグループで山岳・自然分野のメディア事業を手がける株式会社山と溪谷社（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：川崎深雪）は、『タネはどこからきたか?』新装版を出版いたしました。

生態学者で東京大学名誉教授、元中央大学教授の鷲谷いづみ先生と、植物生態写真家の故・埴沙萌さんの著書として2002年に出版されて以来、本書は子供から大人まで広く愛読されてきました。

発売から18年経ってなお、この本の魅力は古くならないどころか、今でも新鮮な驚きを与えてくれます。それは、小さなタネという存在とほかの生き物との深い関わりや、自然全体とのつながりについて、子供でもわかる平易な文章と、美しい「生態写真」で伝えているためです。



たとえば、ある一本の木の幹にたくさんのスマレが咲いている写真が載っています。この写真を一目見た生態学者は、なぜそこにスマレが咲いているのか、数年にも及ぶストーリーを解き明かします。そのタネ証しはこうです。

「日だまりの木の幹にコスミレの小さいけれどもはなやかな花束。このフラワーアレンジメントは、アリの作品に違いない。おそらくこの幹にはアリの巣があり、そこがアリのゴミためだっただけだ」

スマレのタネには脂質を含むエライオゾームがついていて、アリの餌になります。食べ終わり、不要となったタネが捨てられた場所は、スマレにとっては光も栄養も豊富な適地で、見事な花を咲かせることができたのです。これは偶然ではなく、スマレが進化の過程で身につけた「生存戦略」なのです。



●光と栄養を求めてタネは旅する

アリが運んでいく「タネ」は木の幹のような運命をたどるのです。もちろん、アリは餌としてエライオゾームを食べてしまいます。エライオゾームがなくなれば、アリにとってそれはもう食べ物の残骸です。そこでアリは、餌の中に隠れておけばいいことになります。そこでアリは、葉から運りあてて運りあてたタネの殻に隠れるのです。

スミレの根は浅く、根の浅いからといって地上に出てきたタネを運んでくれるアリは、アリの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。

木の幹の日当たり、ゼンブは、葉の成長などによって葉の陰影が変化します。葉の陰影が変化すると、木の幹の日当たりも変化します。木の幹の日当たりが変化すると、木の幹の日当たりも変化します。木の幹の日当たりが変化すると、木の幹の日当たりも変化します。

▲アリが運んでいく「タネ」は木の幹のような運命をたどるのです。もちろん、アリは餌としてエライオゾームを食べてしまいます。エライオゾームがなくなれば、アリにとってそれはもう食べ物の残骸です。そこでアリは、餌の中に隠れておけばいいことになります。そこでアリは、葉から運りあてて運りあてたタネの殻に隠れるのです。

▲スミレの根は浅く、根の浅いからといって地上に出てきたタネを運んでくれるアリは、アリの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。

▲木の幹の日当たり、ゼンブは、葉の成長などによって葉の陰影が変化します。葉の陰影が変化すると、木の幹の日当たりも変化します。木の幹の日当たりが変化すると、木の幹の日当たりも変化します。

▲スミレの根は浅く、根の浅いからといって地上に出てきたタネを運んでくれるアリは、アリの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。

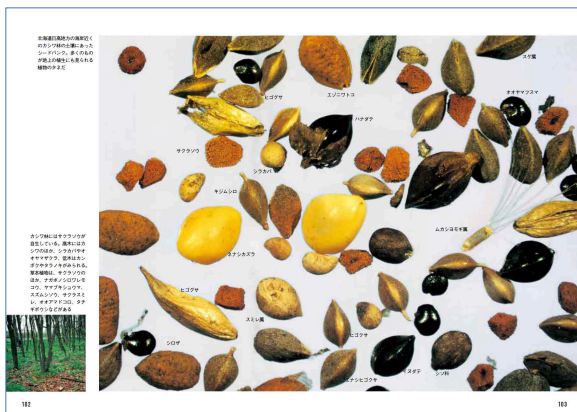
▲木の幹の日当たり、ゼンブは、葉の成長などによって葉の陰影が変化します。葉の陰影が変化すると、木の幹の日当たりも変化します。木の幹の日当たりが変化すると、木の幹の日当たりも変化します。

▲スミレの根は浅く、根の浅いからといって地上に出てきたタネを運んでくれるアリは、アリの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。アリはタネの殻に隠れておけばいいのです。

鳥や動物が植物の実や果実を食べて、厳しい冬の季節を乗り切るとはよく知られています。ところが、与えている報酬に対して、植物が鳥や動物から何を「見返り」に得ているのかについては、ほとんど知られていません。それは、植物が定着し、生きていくのに最適な場所までタネを運ばせること。植物は単に献身的なだけではなく、ときに戦略的で、ずる賢くさえあり、「植物が動物を利用している」とも言えるのです。



またタネは土の中でタイムカプセルのように眠っていることもあります。このタネを用いれば、たとえ地上の植物相が伐採や開発によって失われても、健全だった時代の植生をよみがえらせることができます。つまり、タネは空間だけでなく、時間も超越するのです。



このような本書で紹介されている数々の「エコロジカルな視座」は、すべて科学に基づいており、イマジネーションの世界、おとぎ話の物語とは全く異なります。野外の観察と室内実験から緻密にデータを積み上げて検証された「繁殖戦略」であり、長い進化のプロセスで獲得した「形質」でもあります。

この本が伝えているメッセージは、一見静かでおとなしい植物の生きるたくましさ、そして進化の不思議さです。と同時に、生きものどうしが自らの生存をかけて競争し、共存してきた結果、誕生した「生態系」の美しさでもあります。

出版当時、夏休みの本（緑陰図書）に選ばれたこともある本書は、子供達はもちろん、生きものやエコロジーに関心がある全ての人にお勧めしたい一冊です。

【書誌情報】

総 112 ページ(4C)・A5 判・並製

定価:1,400 円+税

鷺谷いづみ・文

埴沙蒨・写真

<https://www.yamakei.co.jp/products/2820510620.html>

【著者プロフィール】

鷺谷いづみ(わたしに・いづみ)

東京都出身。東京大学理学部卒業、東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。理学博士。筑波大学生物科学系講師、助教授、東京大学大学院農学生命科学研究科教授。2015年定年退任、名誉教授。2015年から中央大学人間総合理工学科教授。2020年3月退任。著書に『生態系を蘇らせる』（NHK出版）、『天と地と人の間で 生態学から広がる世界』（岩波書店）、『コウホリの翼 エコロジストのまなざし』（山と溪谷社）ほか。みどりの学術賞、日本生態学会功労賞などを授賞。

埴沙萌(はに・しゃぼう)

10代の頃よりサボテンの研究を始め、過酷な環境の沙漠に生きる植物から、生きることの仕組みや知恵を学び、身近な植物の生態を撮影している。足元にごく普通に生息している植物たちを生き生きとした一瞬をとらえて、数々の本を出版。『植物記』（福音館）、『たねのゆくえ』（あかね書房）、『きのこふわり孢子の舞』（ポプラ社）ほか。NHKスペシャル「足元の小宇宙 生命を見つめる植物写真家」が話題に。2016年逝去。

【山と溪谷社】 <https://www.yamakei.co.jp/>

1930年創業。月刊誌『山と溪谷』を中心に、国内外で山岳・自然科学・アウトドア等の分野で出版活動を展開。さらに、自然、環境、ライフスタイル、健康の分野で多くの出版物を展開しています。

【インプレスグループ】 <https://www.impressholdings.com/>

株式会社インプレスホールディングス(本社：東京都千代田区、代表取締役：松本大輔、証券コード：東証1部9479)を
持株会社とするメディアグループ。「IT」「音楽」「デザイン」「山岳・自然」「モバイルサービス」「学術・理工学」「旅・
鉄道」を主要テーマに専門性の高いメディア&サービスおよびソリューション事業を展開しています。さらに、コンテ
ンツビジネスのプラットフォーム開発・運営も手がけています。

以上

【本件に関するお問合せ先】

株式会社山と溪谷社 担当：岡山泰史

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング

TEL03-6744-1900 E-mail: info@yamakei.co.jp

<https://www.yamakei.co.jp/>